

今日のキーワード 『実質GDP』は8四半期連続プラス成長

国内総生産（GDP）は、国内で一定期間にどれだけの財やサービスが生み出されたかを示し、経済活動の規模や動向を総合的に示す指標として用いられます。2017年10-12月期の『実質GDP』は前期比+0.1%の増加と8四半期連続で上昇し、1980年代後半のバブル期に12四半期連続で拡大したとき以来、約28年ぶりの長さとなりました。

ポイント1 8四半期連続プラス成長 内需がけん引

- 内閣府が14日に発表した、2017年10-12月期の『実質GDP』成長率（1次速報値）は前期比+0.1%、前期比年率+0.5%となりました。市場予想（ブルームバーグ集計）は下回ったものの8四半期連続のプラス成長となり、1986年4-6月期から1989年1-3月期まで12四半期連続で上昇した時以来、約28年ぶりの長さとなりました。
- 個人消費は前期比+0.5%と、昨夏の天候不順による落ち込みから持ち直したことや、エアコンなどの家電製品の売れ行きが好調だったこともあり、2四半期ぶりにプラスとなりました。設備投資も同+0.7%と5四半期連続でプラスの伸び率となり、内需が『実質GDP』をけん引しました。

ポイント2 外需はわずかにマイナス寄与 輸入が急増

- 一方、外需は前期比▲0.0%とわずかながらマイナス寄与となりました。輸出の伸びは堅調だったものの、スマートフォンや、気温の低下による電力需要の高まりに伴う燃料輸入の増加など、輸入が7-9月期の同▲1.2%から10-12月期は同+2.9%へと急増したためです。
- また、景気の実感に近いとされる名目GDPは燃料価格の上昇により輸入額が増加したことなどから、前期比▲0.0%となりました。



今後の展開 景気の回復基調は継続

- 今後については、足もとの寒波による大雪や野菜価格高騰などの影響で、一時的に個人消費が押し下げられている可能性はありますが、人手不足の状況が続く中で、雇用所得環境は緩やかながら着実に改善が続いています。一時的な落ち込みはあったとしても、基調として見れば消費の持ち直しは続くことが期待されます。外需も、堅調な海外景気を背景に輸出の伸びは続くと考えられます。

ここも
チェック! 2018年2月 6日 日米株式市場の見通し
2018年1月23日 日銀の金融政策は現状維持（2018年1月）

■当資料は、情報提供を目的として、三井住友アセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。■当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。■当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。■当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。■当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。■当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。